

W・M・ヴォーリズの経済思想

——「近江ミッション」の産業的実験——

奥村直彦

はじめに

一 「近江ミッション」産業部門の成立と展開

- (1) 近江セールズ株式会社
- (2) メンソレータムの販売
- (3) ヴォーリズ建築事務所

二 ヴォーリズの経済思想とその“demonstration”

- (1) 不況下の「近江ミッション」の発展
- (2) タイエス・キリストの原理（兄弟主義によるビジネス）
- (3) 神の事業と職業召命観
- (4) 労働と雇用
- (5) 私有財産の制限と賃金
- (6) 商品価格
- (7) 利益金処分と経営分析

(8) 株式資本調達

(9) 経営管理と経営民主主義

(10) 産業立地論

(11) 国際協同主義と人間平等論

おわりに

はじめに

先に筆者は「W・M・ヴォーリズの思想構造」と題する小論⁽¹⁾を書いて、ヴォーリズの思想形成の要因と過程を解明し、さらにその思想構造を統合し、生命あらしめていたものを探究することによって、多面多岐にわたる業績を成し遂げ得た彼の精神的原動力のメカニズムを明らかにしようとして試みた。本稿はその続篇であり、前掲論文の中で特に「他日を期する」⁽²⁾ことを約した「信仰と実業」の問題、換言すれば、彼の経済思想について論究することを目的としている。

周知のように、W・メレル・ヴォーリズは、平信徒^{レインブローヤ}伝道者として一九一一年（明治四四）、「近江基督教伝道団」(Omi Mission)を結成し、以後、近江を中心として宣教・出版・医療・教育など幅広いキリスト教伝道並びに社会活動を展開する一方、それらを経済的に支えるために自ら建築家として設計・管理事務所を開き、さらに雑貨・医薬品等の輸入・製造・販売を行う会社を起す等ユニークで総合的な独立自給伝道の道を歩んだ⁽³⁾。したがってヴォーリズがそれらの実業を経営するに当っては、伝道活動との関連において何らかの理念が想定されるし、さらにその背景には

産業活動の支えとなる価値体系としての経済思想の存在が予見される筈である。

一般に「人の思想はその住んでいる社会の事情によって支配せられ、その環境を異にするに従って異った思想を生ずることが少くない」と言われる。ある思想はその時代の人々の生活、階級や地域などの集団に関係するものであるが、他方ある思想の影響によって社会に変化が生成されるといった相互作用が見られることもまた事実である。しかし、その作用は単なる物理的な関数関係ではなく、あくまでも人間の主体的な態度決定を媒介として行われるため、きわめて複雑な要因を含むから、それぞれ個々の場合について慎重に検討しなければならない。特に外来思想に触発されて独自の思想を形成して来た歴史を持つわが国の場合、格別の注意と手続きが必要とされることは論をまたないであろう。その意味で、単に近江のみならず、当時のわが国にとって、一九世紀アメリカの典型的なピュリタン家庭に生育したヴォーリスの抱く経営理念や思想は、いわゆる外来思想であり当時の日本人には容易になじまない、きわめて特色あるものであったことに留意する必要がある。

本稿では、(一)まずヴォーリスの思想がどのような事業形態を形成し、また反応を呼び起していったのか、「近江ミッション」の産業部門成立の事実経過をたどっていくことにしたい。ただその際、個々の事業の経営内容の分析に深入りすることはしない。(二)つぎにそれらの実業経験をふまえてヴォーリスが自らの経営理念や経済思想を論述した、いくつかの論文や講演記録を中心として考察を進めていく。必要に応じ、裏付となる資料によって彼の所説を検証することは言う迄もない。(三)時代としては、一九二〇年頃から三五年頃に至るほぼ一五年間を視野に置くことにする。

それは、この間に「近江ミッション」の産業部門が確立され、かつ飛躍的な発展を見たからであり、しかも日本を含めた資本主義諸国が第一次世界大戦後の大恐慌と不況に苦しんでいた時期に当るからである。この著しい対称の中に

は、何か世の常識とは異なった原理があったのではないかと予測されるが、それを論究するのが本稿の主題である。

一 「近江ミッシェン」産業部門の成立と展開

(1) 「近江セールズ株式会社」(The Omni Sales Company, Ltd.)

一九二一年(明治四十四)結成以来、「近江基督教伝道団」(以下、「近江ミッシェン」という)を経済的に支えて来たのは、先にも触れた通りヴォーリス自身の主宰する建築設計監理業であった。当時、彼はこれを「ヴォーリス合名会社」に組織し、建築設計監理の他、次第に建築材料の輸入販売をも取扱うようになっていったが、一九二〇年(大正九)二月、それらの商品輸入部門をまとめて「近江セールズ株式会社」(The Omni Sales Company, Ltd.)を設立し、従来の建築設計監理業は「ヴォーリス建築事務所」(W. M. Vories & Company, Architects)に戻り、「近江ミッシェン」内の一部門として独立することになった。

同年一月一三日に彦根区裁判所八幡出張所に登記された商事登記によれば、「近江セールズ株式会社」は、次のような法人であった。⁽⁶⁾すなわち、本店を滋賀県蒲生郡八幡町大字魚屋町元二十九番地に置き、資本金は一〇万円(一株五〇円、一二四五〇錢払込み)で設立目的は諸建築材料及び附属品、塗料、薬品ならびに雑貨の輸入販売にある、とされていた。設立年月日は大正九年二月六日。設立時の役員は取締役として吉田悦蔵、村田幸一郎、北米合衆国民・ウキリアム・メレル・ヴォーリズの、三名、監査役は浪川岩次郎であった。しかしここで最も注目すべきことは、この会社の定款第二条に、「当会社ハ……」前記商品の輸出入販売をなすのみならず「其利益ノ大部分ヲ近江基督教慈善教化財団ニ贈与スルヲ以テ目的トス」とうたわれていたこと、また同三三条では「当会社ノ損益計算ハ每期総益金ヨ

リ総損金ヲ控除シタルモノヲ純益金トシ左記順序ニ依リ之レヲ処分ス 但株主總會ノ決議ニヨリ其一部ヲ使用人ノ救恤基金又ハ別途積立金及後期繰越金トナスコトヲ得」(以上二カ所傍点筆者)と定められていたことである。さらに前記第二条の「目的」を受けて、利益金処分の項は「一、近江、基督、慈善、教化、財、團、贈、与、金、百分ノ五拾以上、二、法定積立金、百分ノ五以上、三、財産減損償却金、百分ノ五以内、四、削除、五、株主配当金、以上ノ残額」(傍点筆者)とあることなどから見て、「近江セールズ株式会社」が最初から「近江ミッション」の資金源として設立された会社であることは明らかである。なお右のように、利益金処分の規定中に資本提供者(株主)の利益より、従業員の福利を優先させる条項も見られ、この会社が一般の概念から考へるとかなり特異なものであったとの感を深くするのである。これらのユニークな定款がいかに実践されたか、については後に検証することになるが、われわれはまず、この定款自体の中に世の中の常識をくつがえすに足るヴォーリスの経営理念、經濟思想の一端を管見することができる。

設立当初、「近江セールズ株式会社」は、「ヴォーリス合名会社」から引継いだ商品、例えば米国モア社(シカゴ)のペンキ、ステイン(染料)、モレスコ(壁塗材料)、またサージェント社(ニューヨーク)の建築用建具、金具、等を輸入販売し、一九二二年(大正一一)からは同じく米国ジャクソン・モートンピアノ会社の日本代理店として、ミズナーピアノ(The MESSNER)の販売を開始している。これらの事実からも知る通り、この会社は主として建築関係の雜貨を取扱う商事会社であった。なお同二二年夏頃からはドルバック技師(Fred Dortzbach)を迎えて衛生暖房工事の受注を開始したが、一九二三年(大正一二)九月の関東大震災によって工事費の回収不能が生じ、また建築部門が大きな損害をこうむったこともあって、翌年には暖房工部門を閉鎖し、ドルバックも退社、帰国している。

一方、この会社が設立当初から扱いつつあったメンソレータムの医薬品販売部門は、はじめのうちは社内でもさし

て期待されていなかったにもかかわらず、次第に活況を呈し、後には、建築部門（「ヴォーリス建築事務所」）の寄附金と合わせると「近江ミッション」の会計全体の九割を支えるほどの成長を遂げるに至っている。それは具体的にどういふ経過によったのであろうか。

(2) メンソレータムの販売

一九一三年（大正二）ヴォーリスは健康を害して一時帰国し、故郷コロラド州のグレンウッドスプリングスで療養していたが、五月頃、その前年から米国に留学中であった吉田悦蔵が訪ねて来た。八月に吉田は、カンザスシティで開かれていた海外伝道学生奉仕団（*Student Volunteer Movement for Foreign Mission, S. V. M*と略す）の大会に出席し、そこでメンソレータムの発明者であるA・A・ハイド（*Albert Alexander Hyde, 1848-1935*）に初めて出会う機会を得た。ヴォーリスはハイドとはすでに旧知の間柄であったから、大会終了後誘われてヴォーリスと吉田の二人がペンシルヴァニア州エステスパーク（*Estes Park*）にあるハイドの別荘を訪問したのである。

A・A・ハイドはマサチューセッツ州リーの出身で、青年の頃から堅く信仰に立って実業にたずさわり、様々な苦心の末メンソレータムを発明、その創業者として巨万の富を得た典型的なアメリカ人実業家で、立志伝中の人であったが、彼はまた、その収入の十分の一を献げるところから始めて、遂には十分の九までを社会事業や福音宣伝に献げるに至った篤信の人物でもあった。¹⁰ヴォーリスらから「近江ミッション」の働きを聞いて心動かされたハイドは、早速湖畔伝道のためのモーターボートを寄附したが、これが後の福音船「ガリラヤ丸」であり、湖上の名物として「近江ミッション」の伝道活動に貢献したことはよく知られている。¹¹またハイドは、このとき日本におけるメンソレータムの販売をヴォーリスに薦めたが、後にこれが、わが国における製造権を含む独占的な販売の権利としてヴォーリス

に与えられ、「米国メンソレータム会社」と「近江セールズ株式会社」(後の「株式会社近江兄弟社」との間)に交されることになった契約の起源である。この両社間の契約は様々な変遷をたどりながらも、一九七四年(昭和四九)一二月、「株式会社近江兄弟社」が経営不振から商法による会社整理を申請し、両社間の関係が断絶するまで、約六〇年の長きにわたって続けられ、メンソレータムは「近江ミッション」(後の「近江兄弟社」)の重要な資金源としての役割を果たしたのである。なおこの権利は現在、他社の手に移り、「株式会社近江兄弟社」は、メンソレータムに代る同種の医薬品メンタームを主力商品として再建されている。

先にも触れたように、メンソレータムの売れ行きは、最初「近江ミッション」内ですらさして期待されていなかった。しかし一九二〇年(大正九)頃から下関市出身の鶴原誠蔵の尽力によって大手筋の問題に販路を広げることができ、また同年、東京で開かれた第八回世界日曜学校大会で知り合った吉田悦蔵の懇請によって「近江セールズ」に入社した佐藤安太郎らの努力により、やがて全国に名を知られるに至った。佐藤はまず全国各地の教会を廻って教会の婦人会、矯風会、青年会などに呼びかけ、この商品が広く一般に浸透するようにつとめたのである。また彼は博覧会等における実物宣伝にも力を注いだ。吉田も『湖畔の声』にメンソレータムの広告をのせるなどの方法で宣伝につとめ、一九二五年(大正一四)には、Y・M・C・A出身の木村己之吉の進言を入れて大阪朝日新聞と特約を結び、一ページ大の巨大広告を掲げるなど、大がかりな新聞広告による近代的宣伝を行った。なお一九二三年(大正一二)頃からは竹内縁之助らの尽力により、メンソレータムが朝鮮・満州等の外地にも進出し、キリスト教に基づく人道的な販売方法によって次第に信用を得、販路を拡大していったのである。

(3)ヴォーリス建築事務所 (W. M. Vories & Company, Architects)

幼少時から芸術的天分に優れ、絵画もよくしたヴォーリスは、学生時代には将来建築家として立つことを希望し、M・I・T (Massachusetts Institute of Technology) への進学を考えていたようである。⁽¹⁷⁾ しかし一九〇二年三月、彼はコロラド大学在学中、カナダのトロントで開かれた海外伝道学生奉仕団世界大会における召命⁽¹⁸⁾によって、その希望を放棄し、自ら海外伝道に赴く決意を固めると、それに備えて進路を哲学科に転じて同大学を卒業している。

ヴォーリスが一九〇七年(明治四〇)滋賀県立商業学校教師の職をキリスト教伝道の故を以て解かれたあとも、引き続き、なお、近江の地に踏み留って伝道続けることを決意したとき、彼の生活を支えたものは、一度は召命の故に放棄した——キリスト教信仰の立場から見れば、神に献げた——と言うべきかも知れない——建築設計の業であつた。⁽¹⁹⁾ 彼は京都Y・M・C・Aの建築現場監督を最初の仕事として、次第に宣教師仲間や教会関係から建築設計監理の注文を受けるようになり、専門の建築家を雇入れる必要を感じて来た。一九一〇年(明治四三)同志を得る目的で一たん帰国したヴォーリスは、同年二月、コーネル大学建築科を卒え、しかもS・V・Mの一員でもあつたチェーピン(Cesar G. Chapin)を伴って戻って来ると、二月一三日には、吉田の母親が提供した現金九〇〇円及びヴォーリス、チェーピンらの労務出資二、六〇〇円で建築設計監理を業とする「ヴォーリス合名会社」を設立したのである。⁽²⁰⁾ また後には吉田と同じヴォーリスの教え子で、商業学校卒業後工務店などで建築の仕事をしていた村田幸一郎も加わつた。さらに一九一三年(大正二)にはオハイオ州立大学で建築を専攻したヴォーゲル(Joshua H. Vogel)が加わり、一五年(大正四)には、やがてヴォーゲル夫人となつた女流建築家ホリスター(Helen Hollister)も来日、なお後に建築デザインに才能を発揮した佐藤久勝も加わっている。このようにして「ヴォーリス合名会社」はスタッフも整つて次第に盛況

を呈し、一九二〇年（大正九）、前記のように「近江セールズ株式会社」の設立分離により、建築設計監理のみを専門とする「ヴォーリス建築事務所」として独立する頃には、すでに全国各地のキリスト教会、Y・M・C・A、ミッションスクール、デパート等を数多く手がけるすぐれたアーキテクト（architects）に成長していたのである。²¹

ヴォーリスの建築の特色は、特定の型にはまることを嫌い、外装より内容を重んじる点にあった。また無駄を排し実用的で使い易いように工夫がこらされていて、それが需要者に喜ばれ、注文が増えていく結果を呼んだと考えられる。ここにも質実、奉仕、合理性など彼のピューリタンのエトスが発現しているのを見ることが出来る。

ヴォーリス建築事務所は一九二五年（大正一四）ヴォーリス個人名義の事務所から、各自一〇〇〇〇円の出資と労務提供を約束するヴォーリス、吉田、村田ら七名による、匿名組合組織となった。これは当時社運をかけた大事業であった大阪の大同生命ビルの設計工事について、これをヴォーリス個人の所得とみなされ、大きな税金を課せられたことによるものであった。²²しかし調査の結果、創立以来、利益のすべてを「近江ミッション」に寄附して来た事実が認められ、税務当局の理解と減額があったと言われている。事実、一九二二年（大正一一）の記録によれば、その年度の「近江ミッション」の伝道事業に要した費用五万七千六百円のうち、「ヴォーリス建築事務所」が寄附したものは三万八千四百七十七円（約六七パーセント）に達していたのである。

こうしてヴォーリス建築の名声は高まり、全国のみならず朝鮮等の外地へも進出して「近江ミッション」に大きな利益をもたらしたが、前述のように、メンソレータムの進展に伴い、ミッションへの寄附金の比率は、「近江セールズ株式会社」に逆転されていくことになる。しかしヴォーリスらが全力を注いで全国各地に建てた建築物の存在は、金銭では計り難い文化的価値と信用と自信とを「近江ミッション」にもたらしたことは銘記されてよい。

二 ヴォーリズの経済思想とその demonstration

(1) 不況下における「近江ミッシオン」の発展

ヴォーリズは、戦前の「近江ミッシオン」があらゆる面で最盛期にあったと考えられる一九三〇年代前半を中心として「信仰と実業」に関する論考をいくつか発表している。それはミッシオン創立以来幾多の困難の中を、信仰の冒險によって切抜けて来たヴォーリズが、自らの理想の実現をまのあたりにしつつある、と考えてもおかしくはない状況が展開されていた時期であったからである。すなわち「近江ミッシオン」の日々の実践活動が彼の思想や哲学を実証 (demonstrate) しつつあったから彼がそれを、あかし⁶⁴したいと思つたとしても不思議ではなかつた。産業部門の営業成績の向上につれて教化部門も多方面に進展し、成長しつつあった。ヴォーリズのヴィジョン通り「一粒のからし種」 (A Mustard Seed) が成長して「大きな枝を張り鳥が宿るほど」⁶⁵になつていたのである。

「はじめに」もちょっと触れたように、当時は、すでに帝国主義段階に入つていた世界資本主義が、第一次大戦後の「全般的危機」 (Allgemeine Krise) から立直れず、特に一九二九年 (昭和四) には世界的恐慌が発生してわが国でも不況と金融恐慌に苦しんでいる時であつた。かかる時期に「近江ミッシオン」が奇跡的な発展を遂げたのは何故なのか、またいかなる原理や方法がとられていたのかが問題となる。以下その疑問を解明しつつヴォーリズの思想に迫つていくことにしたい。

(2) イエス・キリストの原理 (兄弟主義によるビジネス)

前節に述べたヴォーリズの経済諸論考の中で、特に注目すべきものの一つは、リード (J. Paul Reed) によって編纂

われ、⁽⁸⁸⁾「近江シッシン」出版部 (Book Department, Omi Mission) が出した *Business and Brotherhood* (実業と兄弟主義) 所収の “The Industrial Experiment of Omi Mission” (近江シッシン) における産業的実験⁽⁸⁹⁾である。ヴォーリズはこの論文の中で「我らは……『近江シッシン』の一部門である『近江セールズ株式会社』の現在の活動を考察するに当って、これを一つの実験 (an experiment) とみなしており、⁽⁹⁰⁾もし最も高い評価を与えらるゝとして、われらの目ざす理想社会実現途上の一段階に過ぎない」と認識している」(以下原文引用は拙訳による) と述べ、続いて「我らはイエスキリストが『神の国』(The Kingdom of God) と呼ばれた理想社会の実現を待望するものではあるが、革命の暴力などによる社会進歩は信じないが故に、徐々にしかも不断に理想社会実現に向って働かなければならない」と語って、彼が指向する「神の国」とその実現方法がどのようなものであるかも知らかにしている。ヴォーリズの「神の国」思想については、すでに先の拙稿論文で説明したところであるが、⁽⁹¹⁾これは彼の経済思想を知る上でも基本的な重要な概念であると言わなければならない。何故ならヴォーリズの全生涯の思想と行動の根底には、「神の国」というヴィジョンが確固として存在し、すべてはその目標に向って営まれたと考えられるからである。したがってそれは経済思想においても例外ではなく、そこから導き出された彼の経済原理は「イエス・キリストの原理」(The Principle of Jesus Christ) と呼ばれ、⁽⁹²⁾次の聖書の言葉に根拠を置いていた。

、自分を愛するようになたの隣り人を愛せよ。(Thou shalt love thy neighbor as thyself.)⁽⁹³⁾

人々がこれは宗教の戒律であって経済の原理ではないと考えるのはもつともである。しかしヴォーリズはここできわめて重要なテーゼを提出して、このイエスの言葉がビジネスに適用されなければならない理由を説明している。すなわち、彼によれば「ビジネスとは隣人との取引を内容とする社会制度である。」(Business is a social institution and

involves transactions with one's neighbors⁽⁸⁵⁾したがってビジネスは、商人にとって、教育や医療や伝道などと同様、社会奉仕であり、公共の利益のために取引者相互が尽すべき一つの信頼 (a trust) なのであって、一般に言われているように、自己の利益を得るための闘争であるとの考えは真向から否定される。そこで、ヴォーリスは取引の正常な手数料以上に商人が利益を得ることを非難し「ちょうど真の芸術家が目先の利益のために (for easy profits) 安物の作品をつくらぬように、真の商人もまたもうけの近道とばかりに暴利を得ようとせず、恒久的な社会奉仕の道具となるようにビジネスの基礎を築くべきである⁽⁸⁶⁾」と主張するのである。

(3) 「神の事業」と職業召命観

以上のようなヴォーリスの考え方の根底には、「我らの生涯は、神の大きな計画に導かれて営まれる一つの信頼 (a trust) であって、自己の快楽のためにはない⁽⁸⁷⁾」とするピューリタン的人間観がある。だから彼は商人も説教者や医者と同様、神の召命によって立つ重要な職務なのであると説いており、そこにヴォーリスの抱懐する典型的なカルヴァン流職業召命観が貫徹しているのを見ることができ。すなわち、「すべては神からの預託であって、我われは神の事業の補助者 (helpers) である⁽⁸⁸⁾」とする。そこから勤労、節制、節約、創意工夫、合理性などのピューリタンのエトスが生じることは言うまでもなく、彼は「近江ミッシェン」のすべての事業を通してその思想を実践しようとして試みたのである。

要するにヴォーリスは、クリスチャンの事業とは神の事業に他ならず、したがって神の助けを期待し得るし、教会と同様事業の上にも神の導きがある筈だと考えたのであった。だから「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう⁽⁸⁹⁾」というイエスの言葉を掛け値なしに信じ得たのである

し、それを実行することを「信仰の冒険」としたのである。ここにはもはや思想の領域を超越した信仰の世界があり、そのことの是非を論じるのはこの小論の目的ではない。ただここでは、ヴォーリズの経済活動の誘因 (Incentive) がそこにあつたことを指摘するにとどめたい。ただその誘因は、マックス・ヴェーバー (Max Weber) の説明したような、神の選び、救いの確信を求めるためのもの⁽⁸³⁾ではなく、あくまでも「近江シッシン」産業部門の経済活動自体が神をあかしするもの、*demonstrate* するものであると主張するところにヴォーリズの思想の独自性がある。それを裏付けるものは、もう一つの重要な彼の経済的論考を含む *The Omni Brotherhood in Nippon* (日本における近江兄弟社) の中の次の一文⁽⁸⁴⁾である。'I have already pointed out the significant fact that the earning departments of the Brotherhood are all designed to serve as demonstrations of Christianity rather than as mere income producers.' (下線筆者)

(4) 労働と雇用

前節に述べたヴォーリズのピューリタニズムに基く信仰態度からして、聖日厳守のエトスは彼の最も重視するところであつた。日曜日は完全に休業し、教会の礼拝に出席して靈的な発展と奉仕に用いるべきことを、自らも厳守し、「近江シッシン」の社員たちにも要求した。これは彼がまだ商業学校教師であつた頃でさえ、来日後最初の事業ともいふべき八幡基督教青年会館 (Y・M・C・A) を建てるに当って、業者への条件として「日曜日ハ仕事ヲ必ず為サザル事但シ必ず一人ノ見張番ヲ置ク事」⁽⁸⁵⁾と明記したほど徹底したものであつた。

つぎに、この聖日厳守は単に信仰上の問題であるばかりではなく、人道的な兄弟主義の思想とも関連していたことは注意すべき点である。それはヴォーリズの、次のような皮肉をこめた西欧富有家庭の紹介記事の中に具体的に示さ

れている。⁽⁴⁸⁾

ある金満家の未亡人の家庭ではその召使達は全然人間扱にはされない。：私はその家庭にあって少しも愉快でなかった。又その家は正統派の教会に属していたにもかゝらず何のインスピレーションも起らなかつた。

外の家では、愉快な事には、その家の運転手（しかも黒人の）に紹介されて（その主人が、彼に何のへだても持っていないのを知って）驚き入った。……私は又その家の女中頭やコックにも紹介されたが、いづれも家族の一人であるような感じを受けた。日曜日には教会に御出席になつて、敬虔なる御家族のために大げさな食事を山盛り作るのに汗だくになるようなことは勿論ない。雇人達は皆自由に教会に出席することが出来る。：しかも一日中自由にて。（宮家警夫訳、傍点筆者）

これは彼自身の日常生活においても実践されたことであり、安息日に買物をするこゝさえ禁じたのは、こうした配慮からであつた。しかしこの実践のためには日曜日の食糧を買い溜めておく金銭的余裕と大冷蔵庫が必要であり、当時のわが国の庶民生活の実情からみれば、これも所詮、理想主義的な外来思想であると批判されないことはない。いづれにせよ、ヴォーリスにとって聖日厳守は神の命令であり、六日働いて一日休むことは能率の上から言つても、自然で合理的なことであると確信していたから、これをきびしく守ろうとしたのであつた。その実例として、彼は、日曜休業を厳守する「ヴォーリス建築事務所」が示した実績を挙げ、⁽⁴⁹⁾さらに労働者側から見ても、請負業者とその従業員たちが、日曜安息の故にはじめて子供等と親しむことができるようになった、と喜びの報告を寄せている事実を紹介している。⁽⁴⁸⁾

また建築業界では仕事の性質上、常に多くの臨時職員を使用し、工事終了後は解雇して労働経費を調節する風習があるが、ヴォーリスはその非人道性を指摘すると共に、「近江ミッション」において彼独得の雇用システムを実施している。すなわち、「近江ミッション」の社員は、団員規則（一九三〇年）⁽⁴⁵⁾によれば、正員（Full Members）、準員（Asso-

cate Members) 補員 (Candidate Members) の三種とし、正員は福音主義基督教徒ですでに滿三年以上準員であり、生涯をミッションの事業に捧げるものとされる。準員は同じく福音主義の基督教徒で実行委員全員の承認により、補員は「近江ミッション」綱領の主義に賛同し、基督教的生活をなして基督教運動に障害とならない者で、やはり実行委員全員の承認を必要とした。補員は「見習員」と称されることもあったが、新入社員はまずこの見習員から出発し、自分が「近江ミッション」の団員として適當であるか否かを、本人とミッション双方で見定める期間、いわば試用期間を置く制度であった。補員の間キリスト者となり、準員に昇格すると様々な選挙権等が与えられ、さらに正員になればミッションの政策決定 (Policy making) や財政に参画し得る、従業員経営者のような立場に立つことを意味した。

この制度は一種のヒエラルキー (Hierarchy) であり、今日から見れば種々の問題を含んでいると言えるが、ヴォーリスの目指した所は、この制度により単なる「従業員」から仲間へ (From "employee" to partnership) の途を開くことによって、彼等がいつまでも雇用者と雇人の關係に置かれるよりも永続的、自発的かつ獨創的に仕事ができるのではないかと、この考えであり、「職業とは社会奉仕なり」とする彼の職業観とモラルをさらに徹底するための方法であったと見ることが出来る。要するに、全員を挙げて伝道と社会奉仕に生きようとする「近江ミッション」にとって、社員にはこれだけのきびしいモラルと手続きが要求されるのは当然とする反面、これに合わないと感じればモラトリアムの期間中に自ら見きわめて、自由に他の職業を選択すればよいとするものであった。

職業は神の召命によるのであって、金儲けのためではないという、ピューリタニズムがここにもきびしく生きていたのである。

(5) 私有財産の制限と賃金

経済学のいわゆる「分配論」から見た「近江ミッション」産業部の特色は、何よりも賃金の生活費的考え方にあると言つてよい。換言すれば、ヴォーリズの経済思想の特色は私有財産の制限を含む、賃金についての考え方の中に於いて顕著である。彼は、俸給はその人の生活費を提供するものであつて、個人的蓄財や不時の出費についての蓄え分は含まないとした。⁽⁴⁶⁾したがつて後者、つまり社員有病気とか冠婚葬祭等に際しては、ミッションの中央会計 (the central treasury) から、実行委員会の提議によつて臨時に支出され、子女の教育費に関しても、同様の手続きに従つて必要に於いて支給された。これは一種の共有組織であるが、「近江ミッション」ではこれを「合有組織」(the system of joint ownership) と称し、その実施は兄弟主義に裏打ちされた社員相互の公平で寛大な精神に依存するものとされた。⁽⁴⁷⁾それは、ミッションが万一解散したような場合、財産のとり合いとなるような共有組織や唯物的な共產主義とは異なる組織であることを示す用語であると思われる。ヴォーリズは「そのような抽象的なものより、何か確たる具体的な保証を」と要求する人々に対しては、次のようにたずねたいとして、「それではあなたは自分の父親に対して、もしあなたが不幸な境遇に陥つたときにも絶対見捨てないという実印を捺した契約書を要求しますか⁽⁴⁸⁾」と述べている。しからば、仮にこの合有組織がうまく働き、社員たちが生活において後顧の憂いなく仕事に専心できるようになつたとしても、蓄財等の利潤動機 (profit motive) を禁止している以上、当然それに代る誘因を何に求めるのかという今日でも社会主義経済が直面している困難な問題に逢着する。それはヴォーリズの場合、言うまでもなく「神の国」のヴィジョンであり、それに向けての創造と奉仕の喜び、一致協力の中に求められた。また、それ故にこそ、社員には前記のようなきびしい福音主義キリスト者のみによるメンバーシップを要求したのである。

この賃金制度は、明らかに、当時の資本主義経済体制の下における一企業内での一種の共産主義的試みであり、キリスト教的経済原理による「実験」であった。これはエルサレム原始教会等に見られる財産制度⁽⁴⁸⁾、あるいは今日でも世界各地に何ヶ所か存在する兄弟主義の社会集団、例えば「The Society of Brothers」⁽⁴⁹⁾あるいは Huttenne 「Bundert」⁽⁵⁰⁾のごとき類型の中に見られるものであるが、「近江ミッション」の場合は、彼らのように閉鎖的ではなく、普通の町中であって株式会社等の社会制度に準拠し、手広く実業を営みながらの「試み」であった所に特長があると見えよう。

(6) 商品価格

アダム・スミス (Adam Smith) によれば、一般に自然価格は生産費に平均利潤を加えたものとされ、マネタリスト的見地から言えば、価格とは需給関係によって左右される市場価格ということになる。ヴォーリスはもとより経済学者ではなかったから、彼の価格論では、自然価格と市場価格の区別が明確にされていないが、「商品の小売価格は消費者の立場に立つてできるだけ抑制するべきこと」⁽⁵²⁾を提唱している。これは例のイエス・キリストの原理によるものであって、資本主義経済下の生産者行動の理論に反するものであるが、この原理の適用が可能なのはたとえば「近江セルズ株式会社」の商品が一種の独占状態にある時に限られるであろうと推察される。事実当時のメンソレータムはそれに近い状態にあり、一二八種にも及ぶ模造品^(イミテーション)が市場に出まわっていた⁽⁵³⁾。その事実から考えても、同社が決して大企業ではないにもかかわらずメンソレータムの商品のプライスリーダー的役割を果たし、フルコスト原則 (Fullcost principle) による管理価格を設定し得たと見て差支えないであろう。現在のところそれを証明する資料は持っていないが、ヴォーリスが、「代理店等の手数料はきちんと見込むべきこと」⁽⁵⁴⁾を付言しているところからも、「近江セル

ズ株式会社」が余裕を持ってメンソレータムの価格決定を行っていたことが察知されるのである。

(7) 利益金処分と経営分析

先にも述べたように、「近江セールズ株式会社」の定款には、その利益の五〇パーセント以上を「近江基督教慈善教化財団」に寄贈することが定められていたが、事実はどうであったのか。試みに一九二七年(昭和二)から二九年(昭和四)に至る三年間について見ると(別表一)の通りである。これによると利益五〇パーセント以上という規定をはるかに超え、九〇パーセント以上に達する寄贈が毎年財団に対して行われており、これは株主の立場を無視した株式会社であったと言わなければならない。不況の時代に「近江セールズ株式会社」がこれだけの利益を出せた理由としては、主力商品がメンソレータムという当時では珍しい舶来品で、何にでも効くといった便利さが喜ばれたこと、つまりヴォーリズの言う消費者の必要とするよい商品であったこと、しかもそれを先に述べたような独特の方法で宣伝普及したこと、そして勤勉と節制、合理性などのピューリタンのエトスを持った社員、従業員たちが「神の国」建設という共通目標に向ってよく働き、その上独自の賃金制度によって人件費総額を抑制し得たことなどが挙げられる。なおその頃金融恐慌のため、軒並み資金難に苦しむ中小企業の中で、この会社がヴォーリズ夫人満喜子の実家、一柳子爵家の関係で加島銀行と関係ができ、当時の自社資本金にはほぼ匹敵する借入金が可能であったことも注目されてよい。

今ここで(別表二)の詳しい分析をする余裕はないが気が付くことを二、三指摘すれば、まず売上利益率の異常な大きさに較べ、資本回転率の極端な低さが目立つことである。したがって総資本利益率も平均以下、あるいはその前後に留まらざるを得ず、収益性はまだ予想したほどではないと言えよう。一方流動比率は余り高いとは言えず、それは

以上見て来たように、株主の利益を無視したこの会社経営を可能にしたものは、第一に先に紹介した定款の規定で

(8) 株式資本調達

	1927.11	1928.11	1929.11
商品売買利益	97,686,36 円	144,330,12 円	171,067,22 円
経費減価償却費	75,503,49	88,040,36	101,679,39
当期利益	22,182,87	56,289,76	69,388,33
財団寄附	20,782,87	53,289,76	64,388,33
寄附/利益比率	94%	95%	93%

(別表1) 「近江セールズ株式会社」の「近江基督教慈善教化財団」への寄附状況 (1927—29年)

	1927	1928	1929	1938	1939
総資本利益率	5.4%	10.9%	—	7.8%	7.2%
売上利益率	22.7%	39.0%	40.6%	7.1%	6.7%
資本回転率	0.24	0.28	—	1.10	1.07
流動比率	113.5%	104.6%	—	103.5%	—
自己資本比率	31.8%	32.1%	—	32.0%	28.2%

(別表2) 「近江セールズ株式会社」財務諸比率 (1927—29年及び1938—39年)

前記の多額の借入資金と不況による取引先勘定の停滞が原因になっていると考えられる。また自己資本比率はわが国の企業としてはまづまずであるが、株式資本の社内調達ぶりから判断すると、かなり低くなっているのは、不況下にも関わらず伸びていくこの会社の事業発展の様子を表わしている。なお同じ表のほぼ一〇年後の諸比率を見れば、かなり落ち着いた経営状態を示していることが分る。

ただ筆者がこれらの財務諸比率を計算する根拠となった当時の財務諸表はきわめて粗略であり、したがって、これらは正確な分析とは言えず、大体の傾向を示すものに過ぎないことを付言しておきたい。

あり、第二は株式資本調達の方法であった。「近江セールズ株式会社」設立に際し、發起人ヴォーリス、吉田、村田らが株式を引受け、その後何回かに亘って行われた増資に当っても資本はすべて内部で調達されて来たのである。さらに自己資本比率を見てもほぼ三〇パーセントを保っていて健全性が伺われる。ヴォーリス自身、増資の際、利殖を目的とする外部の投資は拒絶することを明言している。

一九三〇年（昭和五）現在の株主名簿によればこの会社の発行株式は二〇〇株、払込み額一〇万円でその中、ヴォーリス、吉田、村田の三役員だけで一二〇〇株、六万円を所有し、彼らの夫人名義のものを加えると一七〇〇株、七・五万円（七五パーセント）に達していることが判る。これが「近江セールズ」が高利益をあげながら無配当を続けられた理由であり、彼らがいかに財団の伝道事業に心血を注いでいたか推察されるのである。

(9) 経営管理と経営民主主義

「近江セールズ株式会社」は商法による営利法人として取締役・監査役の役員を置き、民法による公益法人「近江基督教慈善教化財団」には理事・監事が置かれていた。しかし「ヴォーリス建築事務所」を含めたこれら各部門すべての集合体である「近江ミッション」は、実は各部門から成る有機的な共同体であって、もともと「一粒のからし種」から成長したものであった。つまり「近江ミッション」は一つであり、ただ法に従って各法人に分けていたに過ぎなかった。そこで、各法人各部門を超越した「近江ミッション」全体は、実行委員会 (Executive Committee) という機関がこれを運営していたのである。このトップマネージメントグループの構成は、ヴォーリス、吉田、村田のいわゆる三創立者と彼らが選任する者、各部門の中から選出される各代表者の計一二〜一五名から成っていた。そして委員会の長は置かず、「近江ミッション」の長は主イエスであるとの信仰が支配していたと言われている。

この実行委員会の責任は重く、会議は毎月定例に開き、常に満場一致 (unanimous agreement) を原則とした。⁽⁸¹⁾ そのためたとい時間を要しても、多数決原理のごとくせつかちな決定方法や少数者に不満を残すやり方は採らないとヴォーリスは述べているが、彼の徹底した経営民主主義は理解できるとしても、他の面における合理性と思ひ合わせて考えさせられる点である。

また前記のように正員と準員による選挙権、被選挙権を伴う経営参加は大幅にとり入れられ、さらに月一回、すべての部門に働く従業員が集まって全体報告会 (Mission Meeting) を開き、祈りの裡にお互いの事業を報告し合うことが行われていた。

(10) 産業立地論

ヴォーリスの生き方の中には、常に田園志向が見られ、それは彼が幼少期を過したアリゾナの自然や田園生活を愛したと言われる祖父たちの感化によるものと思われる。⁽⁸²⁾ しかしヴォーリスが近江八幡の地へ来住したのは、彼を「青年会英語教師」として滋賀県立商業学校へ斡旋した基督教青年会 (Y・M・C・A) の意向によるものであって、彼自身は命ぜられるままに赴任して来たに過ぎない。ただ、彼が海外宣教を神の召命として受止めた以上、任地はすなわち神の命じた場所であって、それ故にこそ、「しかし、もうこの地へ、来てしまったのだ (But here)」⁽⁸³⁾ という自覚を持ったのである。事実彼はその自覚を終生持ち続け、近江八幡の土と化するまで、この地を離れなかった。

ヴォーリスは、他の理想社会建設者たちと同様、農村生活及び農村伝道の諸問題に深い関心を持ち、その解決に貢献したいという希望を抱いていた。「近江ミッション綱領」にも「本団ハ主トシテ田舎伝道ニ努力ス」とわざわざうたっている。⁽⁸⁴⁾ だから終生、彼が近江の地を離れなかったのは、当時の近江が農村地帯であったこと、したがってそ

が、彼自身が他の宣教師がいよいよ未開拓伝道地で伝道したいと希望していたその望みになう土地であったことによるものと考えられる。さらに忤度すれば、ガリラヤ湖に比すべき琵琶湖が身近かにあることも彼にとって魅力であったに違いない。ヴォーリズは「農村においても興味ある事業を起し、適切な指導者を得るならば、農村青年たちに身を立てる道を開き、農村に引留めておくことができる」と述べ、「健康と生活の安定のためには、都会より田舎の方がまさっている」と主張しているが、これらは今日の意味を持つ所説であり、それは実際「近江ミッション」産業部門の働きを通じてある所までは実証されたのである。

しかし単なる農村伝道団、あるいは農業を中心とする信仰共同体のような集団なら、むしろ地方農村にあってこそ経営が可能とも言えようが、「近江ミッション」を支える産業部門としての「ヴォーリズ建築事務所」や「近江セルズ株式会社」の場合、地方なるが故の困難はなかったであろうか。

まず建築事務所の場合、先述したようにキリストの原理による兄弟主義を徹底した結果、かえって日本国内に多くの後援者をつくり出すことができた。それは当初聖日厳守、残業や夜業拒否のかたくなな姿勢に対して批判はあっても、六日働いて一日休息する方が、一週間無休で仕事をするよりも、結果においてはむしろ早く立派に仕事をやり遂げるものであることを、事実を以て証明したからであった。もちろん清新なデザイン、すぐれた技術をもって、常に顧客の立場に立った入念な設計と行届いた良心的な監理がなされていたこと——それがキリストの原理に他ならないが——、これらが人々に喜ばれ、全国から多くの注文を受けた最大の理由であって、それは、「ヴォーリズ建築事務所」が、そこに設計を依頼し、満足のうちにその建物を使用している顧客の人々の自発的な推薦による他はさしたる宣伝もしなかった、⁽⁸⁸⁾という事実の中によく示されている。

なお「ヴォーリズ建築事務所」は、業務の進展につれて東京（一九一五年）、大阪（一九二二年）、京城（一九三八年）等に出張所を設け、一九二〇年頃からは夏期には軽井沢に事務所を移転して仕事を行ったことからして、建築に関しては、立地論は特に問題にはなっていないと言つてよい。

一方、「近江セールズ株式会社」の場合、先述のように最初は建築材料、雑貨、そして医薬品（メンソレータム）を輸入販売していたが、その際のヴォーリズの理念は、「まず第一に消費者にとつて積極的に利益となる商品のみを取扱うこと、しかも公正な労働条件の下で品物を生産する製造者の製品のみを輸入販売すること」⁽⁶⁰⁾にあった。このように「良い商品は必ず知られて、一般から求められるようになる」というのが彼の信念であり、建築の場合と軌を一にするものであった。

一九三一年（昭和六）「近江セールズ株式会社」は近江八幡魚屋町元に工場を建て、メンソレータムの製造が開始された。こうしてそれまでの輸入・販売会社から製造・販売会社に転じるとなると、単なる良い商品なら必ず売れるといった精神主義的な単純な発想だけでは済まなくなつて来るのは当然であろう。そこで当時の「近江セールズ株式会社」の立地条件を分析してみると、当時、メンソレータムの原料はアメリカから輸入に依つていたといふこの会社の一種の加工産業的性格からして、主として交通、通信、情報などの人工的要因が問題となる条件であつて、用地、用水、気候、災害等の自然的条件は副次的なものに過ぎなかつたと見てよい。労働力は近郊農村からも余裕を以て供給できたし、資金条件については自己資金の他は特定銀行から調達したことは前に記した通りである。ただ市場の開拓については、佐藤安太郎の例に見たように最も苦勞した所であつたが、利益を伝道や社会事業に献げるといふこの会社の使命を説き、教会関係から滲透をはかる独自の宣伝方法によつて、商品の知名度が上るにつれて、困難は次第に

解消していった。なおメンソレータムが、当時、ヴォーリスの言う「消費者にとって利益となる、良い商品」であったことも、立地条件の前提として見落せない点であろう。

要するにヴォーリスの産業立地論は、ただ常識的に田舎の不利なこと、それでもイエス・キリストの原理、兄弟主義によって、良心的なすぐれた商品やサービスを提供することにより困難を克服できると主張していたに過ぎない。ただ彼の場合、積極的に農村に産業を興して青年たちを引留め、その生活を向上させようとした願いが、「近江セーブル株式会社」となって実現し得たのは、以上の分析からも分るように、立地論から見ても、近江八幡がこの企業を立地させる客観的条件下にあったと考える方が妥当であろう。

(11) 国際協調主義と「人間平等論」

自分自身がアメリカ人であったからばかりではなく、そのキリスト教信仰と思想からしても、ヴォーリスの国境を超えた兄弟愛、国際協調主義には確固たるものがあつた。彼は日本人を妻とし、後に帰化して日本国籍となるが、今ここでその意味について触れる余裕はない。いれずれにせよ彼が、国際協力の原理を「近江ミッション」の中心思想の一つとして考え、「綱領」にも明記していることは注目すべき点であり、それはまた、彼の終生のヴィジョンであつた「神の国」の理想とも関係している。何故なら、ヴォーリスによれば、その理想実現を単一国民で確立することは不可能であり、またイエス・キリストの原理を理解するにしても、東洋も西洋もそれぞれの見地からだけでは不満足で、双方が協力してこそそれが可能になると考えるからである。具体的には彼の描いた絵は太平洋を囲んで密接に係する少なくとも四つの国民、日本人、アメリカ人、中国人、朝鮮人を近江ミッションに加えることであつたし、彼は、もしこの小さな団体の中でさえこれら四国民相互の平等主義と兄弟主義が実現できないなら、それ以上の協調の

夢は捨てなければならぬと述べている。⁽¹⁶⁾ これが一九三四年(昭和九)に初版が出、戦時体制に向つていた同四〇年(昭和一五)にも五版を出している本の記事であることから見て、ヴォーリスの国際協調主義、特に朝鮮人観には注目すべきものがある。

実際、「近江ミッシヨン」には創立以来、右の四つの国民はもちろん様々な国籍の人間が働いて来た。しかし、ミッシヨンなら不思議はないとしても、これが「近江セールズ」という企業の場合、やはり先駆的なものとして評価できるのではないかと考えられる。彼の「人間平等論」によれば、⁽¹⁷⁾「……吾々銘々が個人的に自分の価値判断をするに当りて、吾々は実際神から委託されたる吾々の生涯及所有物をいかに処理するかが本当に大切な問題である」としている。また「ただ神のみが人の品定めをすることが可能」なのであるとの前提に立ちながらも「人間は生れたときは平等無差別であるが各自の責任感の相違によりて種々優劣不平等の差が生ずるのである」(以上宮家肇夫訳)と述べている。

ここにはヴォーリスのピューリタンの人間観が表出し、責任人格主義の立場が貫徹しているのを見る。したがって彼の人間観には、今日の教育や社会を覆っている唯物的な能力主義や業績主義の人間評価ではなく、人は、神からの賜物をどれだけ責任を以て生かしたかによって評価がなされ、それも神のみによってなされるのだという聖書の原理⁽¹⁸⁾、いわばイエス・キリストの原理が働いていると考えてよい。この原理が労働生産性向上を至上命令とする営利企業においてどのように適用し得るのかはきわめてむずかしい問題である。それは適材適所主義にも通じるが、常に怠惰への甘えを生む危険を秘めている。しかし人間の神への応答(responsibility)を神のみが評価するというヴォーリスの思想は、社員それぞれに責任ある人格育成を要求する厳しい道への「実験」でもあった。ヴォーリスにとってこれ

は深い信仰と神への服従によってもたらされる聖霊の導きなくしては不可能であり、彼が晩年に至って自己の回想録を「失敗者の自叙伝」と名付けたのはその意識で実に深い意味と痛みによるものであった。

おわりに

以上この小論では、ヴォーリズの経済思想について、その応用実践としての「ヴォーリズ建築事務所」と「近江セーブルズ株式会社」の働きを検証しながら考察を進めて来た。彼は経済学者でも経済思想家でもなく、本来芸術的天分に恵まれた建築家であり、何よりも伝道者、社会事業家であった。だが、彼の経済についての論考は、深い信仰に基く清新で創造性豊かな思想に満ち溢れ、けだしキリスト教経済思想の名に値するものと言えよう。それはまた、彼が日頃抱懐していた理想や、天与のヴィジョンを実現した、あかしとも言うべきものであった。この小論では、主として後半に於て多くそれらの論文を引用しながら論証を進めて来た訳であるが、それを要約すれば、ヴォーリズの経済思想は結局、次の三点に帰するのではないかと思う。

- (一) 産業における兄弟主義の実践。換言すれば、「イエス・キリストの原理」によってビジネスを経営すること。
- (二) 新しい動機による経済組織をつくる。世の中の社会経済体制は反キリスト教的であり、金儲けの動機によって墮落しているが、それを超越した創造と奉仕の動機によって働く新しい組織をつくり、それを demonstrate する。
- (三) 「神の国」の理想社会——宗教と経済の調和した理想的な家族主義的集団のモデルをつくる。これが近江で成功すれば、社会に及ぼし、その開拓運動の先駆となる。

ヴォーリスと彼の「近江ミッション」は、この理想主義的目標に向って働き続けた。前にも何度か触れたように、彼らはその生活基盤として産業部門を持っただけでなく、産業部門の活動そのものが目標への demonstration であったことは特に注目すべき点である。⁽⁸⁸⁾ すなわち「近江ミッション」の産業部門は、元来ミッションの伝道・社会活動を経済的に支えるという実地的な必要から生れたものではあったが、それ自体の活動に、神のおかし、の道具としての使命を持たせ、単なる、金もつげの道具⁽⁸⁹⁾、の位置からこれを精神的に高く引上げたところに、ヴォーリスの経済思想の第一の特長がある。それはまさしく彼が抱いていたピューリタンの職業観と経済倫理のあらわれであった。⁽⁹⁰⁾ 一九三〇年（昭和五）の「近江ミッション」組織表（英文）によれば、教化部門が Exposition Group とされているのに対し、産業部門が Demonstration Group とされていることはその特長をよく示している。やがてこの役割を定めて、「ヴォーリス建築事務所（W. M. Vories and Company, Architects）の働きは (a) Christian Social Order, (b) Evangelization of Clients & Labor, (c) Service to General Missions, (d) Training School とおなじである、⁽⁹¹⁾ また「近江セールズ株式会社」（Omi Sales Co., Ltd.）の働きとしては (a) Christianity in “Industry,” (b) Evangelistic Contracts, (c) Overcoming Prejudices, が挙げられている（下線筆者）。なおこの表では「近江療養院」（Omi Sanatorium）も Demonstration Group に含まれている。とにかくこの組織表自体にヴォーリスの経済思想が特徴的に表出しているのを見るのである。

つぎにこの第一の特長から導かれるヴォーリスの思想の第二の特長は、彼が決して社会から隠遁した理想郷やユロニーを目ざしたのではなく、当時の資本主義経済社会のただ中であって、それと共存し、外面的にはその諸制度に準拠しながら、なおそれとは異質のキリスト教経済組織の建設を目ざした⁽⁹²⁾ という点にある。彼は一応それを成功へと導

き、「来りて見よ」とさえ言い得る自信に満ちた demonstration を行つて、説教だけではなく真の伝道はキリスト教的実生活の中にあるとの彼の日頃の主張を実証して見せたのであった。「近江ミッション」産業部門は、その「宗教的媒体」に他ならなかつたし、それ故にこそ、そこに避け難い矛盾が存在していたことは、先の論文で指摘した通りである。⁽⁸⁸⁾

一九三〇年代の終り頃から「近江ミッション」も次第に戦時体制に順応せざるを得なくなり、事業体としては存続したが、その「予言者的使命」は失われ「神の国」の理想も遠のいて行つた。一方、資本主義経済体制の中にあつて利潤動機を否定するヴォーリズの経済思想に対しても、戦後わが国の経済社会が窮乏期を経て高度成長時代に入つて不慮適応度が強まり、また憲法上や労働力の需給バランスからも、雇用関係における信仰的組織の維持は次第に困難になつて来た。

これらは「近江ミッション（近江兄弟社）」のみならず、戦後のキリスト教界全体に共通した問題ではあるが、とにかくヴォーリズのピューリタンの経済思想と「産業的実験」は多くの矛盾の前にもはや破綻したように見える。しかし彼の説いた「イエス・キリストの原理」は、どんな時代にも普遍的に通用する社会倫理であり、むしろ世の中が金と力に支配され、物質的になるほど必要とされる経済原理である。したがつてその原理から演繹される新しい経済体制を生み出すことがわれわれの今後の課題であり、その意味で、ヴォーリズの経済思想とその「産業的実験」は未だ終つてはいない。

- (1) 拙稿「W・M・ヴォーリスの思想構造」(『キリスト教社会問題研究』第三〇号、同志社大学人文科学研究所、一九八二年)。
- (2) 同論文、三二八ページ。
- (3) これらの複雑な歩みは簡単に要約はできないが、一柳米来留「失敗者の自叙伝」(近江兄弟社湖声社、一九七〇年、一九八〇年再刊)、吉田悦蔵「近江の兄弟」(近江兄弟社、大正二年初版、昭和四四年第六二版)、『湖畔の声』(一柳米来留生誕一〇〇年記念特集号) (近江兄弟社湖声社、昭和五五年一月)、内炭政三「一柳米来留(W・M・ヴォーリス)の一生」(『湖畔の声』第七一八号)現在、一九七六年)、近江兄弟社湖声社)、拙稿、前掲論文、等が参考になる。
- (4) 本庄栄治郎「日本経済思想史」(有斐閣、昭和四四年)三ページ。
- (5) 城塚 登「近代社会思想史」(東京大学出版会、一九七八年)六六ページ。
- (6) 近江基督教慈善教化財団理事会『暫定近江ミッションハンドブック』(近江ミッション図書出版部、昭和五年)三五ページ。
- (7) Wm. Merrill Vories, *The Onni Brotherhood in Nippon*, 5th ed., The Onni Brotherhood Book Department, (1940), p. 105. ここでヴォーリス自身もその特異性を認めてゐる。
- (8) 「雑報」(『湖畔の声』第一一四号、湖声社、大正二一年)一四ページ。
- (9) 拙稿、前掲論文、三二九ページ。
- (10) 近江兄弟社社史編集委員会『近江兄弟社六〇年史』(草稿) 第四分冊、一一六ページ。
- (11) 同書、第五分冊、二九一三〇ページ。
- (12) 同書、第四分冊、八ページ。
- (13) 同書、第四分冊、九一―一〇二ページ。
- (14) 同書、第四分冊、一一一―一二二ページ。
- (15) 同書、第四分冊、一三一―一四二ページ。
- (16) 同書、第四分冊、一八一―二〇二ページ。
- (17) 一柳米来留「失敗者の自叙伝」(前出) 六二ページ。
- (18) 浜田清夫「W・M・ヴォーリスとS・V・M・トロント大会」(同志社アメリカ研究』第二二号、同志社大学アメリカ研究所、一九七六年)、一柳、前掲書六八―七三ページ。拙稿「ヴォーリス研究ノート」(『湖畔の声』第七七―三三三号、湖声社、一九八一年)二〇、一七―一九ページ。
- (19) ヴォーリスは一九〇七年(明治四〇)、滋賀県立商業学校在職中、給与からの積立、旧友の寄附等により、八幡基督教青年会館を建てたが、これが来日後最初に設計した建築である。
- (20) 近江兄弟社社史編集委員会、前掲書、第二分冊、八ページ。

(21) 同書、第三分冊、四一—二ページ。一九二二年(大正一)から一九二〇年(大正九)の組織改変分離独立までの期間だけをとってみても、洛陽(京都)、福岡ルーテル(福岡)、大阪(大阪)、本郷メソジスト(東京)、麻布(東京)等の諸教会。関西学院、明治学院、九州学院、鎮西学院、同志社、フェリス女学校、梅光女学校、青山学院、宮城女学院、福岡英和女学院、横浜共立、女子学院、九州女学院、西南学院、広島女学院等々全国のミッションスクール。朝鮮、東京、横浜、京城、名古屋の各Y・M・C・Aと東山荘。大阪、京都の大丸デパートといった質量共に驚くべき建築を手がけている。

(22) 同書、四〇ページ。

(23) 吉田 生「会計語」『湖畔の声』第一一四号、湖声社、大正一一年)一一—三ページ。

(24) 邦訳されたものとしては「近江ミッションの産業的体験」『湖畔の声』第二二九号、昭和七年)、*「経済生活に於ける神の国の発見」(同、第三三二—号、昭和七年)、*「近江ミッションの実験しつつある七つのプリンシプル」(同第二四二—三号、昭和八年)、*「兄弟生活の三理想、健康、奉仕、幸福」(『新近江』第十六号、昭和九年)、*「近江兄弟社の理想」(『湖畔の声』第二五三号、昭和九年)、「実業生活に於ける兄弟主義」(同、第二五九号、昭和九年)、「近江ミッションの最後」(同、第二五二号、昭和九年)、「私の信念」

『新近江』第三号、昭和一〇年)、「兄弟生活における雇人問題」(『湖畔の声』第二六六号、昭和一〇年)、「神の番頭」(同、第二七〇号、昭和一〇年)、「人間平等論」(同、二七八号、昭和一一年)等があり、共通した内容のものも多い。
*印は講演筆記である。

(25) 新約聖書「マルコによる福音書」四・三一。

(26) 高野利治他『経済学の歴史と理論』(新評論、一九六九年)一四二—三ページ。

(27) メレル・ヴォーリス「実業生活に於ける兄弟主義」(前出)『湖畔の声』第二五九号、昭和九年)九ページ。

(28) William Merrell Vories, *The Industrial Experiment of Oni Mission (Japan): Business and Brotherhood, A Symposium*, ed. by J. Paul Reed, Book DEPARTMENT, OMI BROTHERHOOD, (1934).

(29) *Ibid.*, p. 55.

(30) *Ibid.*

(31) 拙稿「W・M・ヴォーリスの思想構造」(前出)三四三—六ページ。

(32) W. M. Vories, *op. cit.*, p. 56.

(33) 新約聖書「マルコによる福音書」一一・三一。

(34) W. M. Vories, *op. cit.*

(35) *Ibid.*, p. 57.

(36) *Ibid.*

- (37) *Ibid.*, p. 58.
- (38) 新約聖書「マタイによる福音書」六・二三。
- (39) マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫版、昭和四三年）下巻九〇ページ。
- (40) Wm. Merrell Vories, *The Omi Brotherhood in Nippon*, p. 106.
- (41) 近江八幡町基督青年会寄宿舎建築明細表。
- (42) メレル・ヴォーリス「兄弟生活に於ける雇人問題」（前出）三ページ。
- (43) W. M. Vories, *The Industrial Experiment of Omi Mission*, p. 67.
- (44) *Ibid.*, pp. 67-8.
- (45) 『暫定近江シッシェンハンドブック』（前出）一八一—一二ページ。
- (46) W. M. Vories, *op. cit.*, p. 65.
- (47) *Ibid.*, p. 64-5.
- (48) *Ibid.*, p. 65.
- (49) 新約聖書「使徒行伝」二・四三—七。
- (50) 榊原 巖『現代基督者財産共同体の研究』（平凡社、一九六七年）五六ページ以下。
- (51) 同書、一九〇ページ以下。
- (52) W. M. Vories, *op. cit.*, p. 60.
- (53) 沖野岩三郎『吉田悦蔵伝』（近江兄弟社、昭和一九年）三二四—七ページ。
- (54) W. M. Vories, *op. cit.*
- (55) 一九三一年（昭和六）に倍額増資して資本金二〇万円とし、一九三五年（昭和一〇）には三〇万円増資して五〇万円と増した。
- (56) W. M. Vories, *op. cit.*
- (57) 『暫定近江シッシェンハンドブック』（前出）四七—九ページ。
- (58) Wm. M. Vories, *The Omi Brotherhood in Nippon*, p. 101.
- (59) W. M. Vories, *The Industrial Experiment of Omi Mission*, pp. 61-2.
- (60) 『暫定近江シッシェンハンドブック』（前出）一三—一四ページ。
- (61) W. M. Vories, *op. cit.*, pp. 61-2.
- (62) Wm. M. Vories, *The Omi Brotherhood in Nippon*, pp. 103-4.
- (63) 近江兄弟社社史編集委員会、前掲書、第一分冊、一〇ページ。
- (64) 一九〇五年（明治三八）二月二日、ヴォーリス来幡当日の日記の一節。
- (65) 近江兄弟社社史編集委員会、前掲書二〇ページ。この項

はのちに「本団ノ国家ノ根底タリ、指導者ノ輩出スル地方小
都会、農村、漁村ニ福音ヲ宣伝ス」と改められてゐる。拙
稿、前掲論文、三五四ページ。

(66) W. M. Vories, *The Industrial Experiment of Omi Mission*, p. 61.

(67) *Ibid.*

(68) W. M. Vories, *op. cit.*, p. 59.

(69) *Ibid.*, pp. 59-60.

(70) 西岡久雄『経済立地の話』(日本経済新聞社、昭和五〇
年)四一ページ。

(71) 一九一九年(大正八)子爵一柳末徳の三女満喜子と結婚。
一九四一年(昭和一六)、日本国籍を取得、一柳米来留となる。

(72) 「近江基督教伝道団綱領」第二条。

(73) Wm. M. Vories, *The Omi Brotherhood in Nippon*,
p. 110.

(74) *Ibid.*

(75) メレル・ヴォーリス「人間平等論」(『湖畔の声』第二七
八号、湖声社、一九三六年)一四一五ページ。

(76) 新約聖書「マタイによる福音書」二五・一四一三〇。

(77) Wm. M. Vories, *op. cit.*,

(78) Wm. M. Vories, *op. cit.*, p. 101, p. 106, p. 106. 以下
次のように述べられてゐる……the significant fact that the
earning departments of the Brotherhood are all designed

to serve as demonstrations of *Christianity* rather than as
mere income producers.

(79) *Ibid.*

(80) 渡辺公平『カルヴァンとカルヴァイニストたち』(小峯書
店、一九七七)三九一四〇ページ。

(81) 近江基督教慈善教化財団『暫定近江ミッションハンドブ
ック』(前出)。

(82) Wm. M. Vories, *op. cit.*, p. 101.

(83) 拙稿「W・M・ヴォーリスの思想構造」(前出)三四八
ページ。